

大阪学院大学 大阪学院大学短期大学部

Osaka Gakuin FD Journal

渺望

びょうぼう

vol.21

May 2026

学修者本位の
教育の実現に
向けて

—「卒業時満足度調査」の改善

特集 1

学修成果の把握

—2025年度「キャリア
チューター・ホームカミング」
対談

特集 2

産業界との意見交換会

—短期大学部の自己点検活動



学修者本位の教育の実現に向けて

「卒業時満足度調査」の改善「授業への満足度」について

現在、日本の教育は大きく変化している。2017年の文部科学省の学習指導要領の改訂から始まった、能動的教育(アクティブラーニング)の波は、小学校、中学校から高等学校へ広がり、大学教育にも及んでいる。

こうした教育の変化により、大学教育の実質化が行われ、学修成果の可視化が進んでいる。その一環として「学修者本位の教育」が謳われ、「学修者目線」で授業をすることが求められている。大学側が「何を教えたか」ではなく、「学生がどのように成長するか」を基準とすることが求められている。このことから大阪学院大学(以下本学という)では、学修者本位の教育をさらに進めるために、学生の意見を聞く「卒業時満足度調査」を行っている。

はじめに
教育開発支援センター(以下センターという)では、2007年度より「卒業時満足度調査」を行ってきたが、質問項目が90問もあり、回答者の負担となっていた。これを軽減し、解析上の重複を抑えるため、重回帰分析を活用して設問数の絞り込みを行い、設問数を削減することを検討した。

『渺望』vol.3, p.16(2008)において「平成18年度卒業生の大学満足度に関する調査結果」を掲載している。そこでは「いかに授業の満足度を高めるのか、あるいは、いかに対人関係(特に、教職員との

関係)を高めながら授業の満足度を高めるかが、ポイントであると言えそうです」とまとめている。

この結果をもとに、「授業への満足度」を問う設問13と36に着目し分析を行うこととした(表1)。分析には、2020年度から2023年度までの調査データを使用した。分析の対象は、問13「授業内容に満足していませんか」を従属変数(予測したい項目)とし、問14と36を説明変数候補としてステップワイズ法による分析を行った。その結果、いずれの年度においても問14「カリキュラムに満足していませんか」が最も大きく影響していることが明らかになった。次に、問14を従属変数に置き換え、問19と36について再度、分析を行って得られた結果を総合的に検討し、設問を整理した。

問14「カリキュラムに満足していませんか」の年度別分析結果

ここでは、問14「カリキュラムに満足していませんか」を従属変数とした問19と36からの影響について分析を行った。センターでは標準化係数(β)の値を検討しながら、設問の絞り込みを行うこととなった(表2)。

4年間の総合的な結果と考察

以上の分析を通じ、問13「授業内容に満足していませんか」には、問14「カリキュラムに満足していま

したか」の寄与度が最も大きいこと、そして問14は共通科目や専攻科目、コース制度、4学期制など複数の要因によって構成されることが明確となった。この結果、2025年3月に実施する「卒業時満足度調査」では、問19、22、23、24、26を残すことになった。

最後に、2017年度から2020年度の調査結果をまとめたデータで重回帰分析を行った。その結果、問13を従属変数とすると、問14の影響が突出しており、問14のみを投入したモデルにおける標準化回帰係数は0.862、決定係数(以下、 R^2 という)は0.743であった。一方、問14を従属変数とした分析では、問19、22、23、24、26を投入したモデルを用いたところ、各設問の標準化回帰係数は順に0.162、0.164、0.147、0.204、0.238であり、 R^2 は0.640であった。この結果から、「授業内容への満足度」は、まず「カリキュラムへの満足度」によって強く規定され、カリキュラムへの満足度は、4学期制に対する評価、共通科目の満足度は、4学期制に対する評価、共通科目の満足度は、4学期制に対する評価、専攻科目の専門性や難易度に対する評価によって成り立っていることが確認された(図1)。

まとめ

本分析では、問13「授業内容に満足していませんか」に対する最大要因として、問14「カリキュラムに満足していませんか」が、いずれの年度でも最も大

表2 問14「カリキュラムに満足していましたか」に対する標準化係数(β)による影響度の高い項目

問番号	2017年 Model4	2018年 Model4	2019年 Model4	2020年 Model4
問19	—	0.188	0.157	0.195
問22	0.239	—	0.284	—
問23	—	0.173	—	0.263
問24	0.243	0.280	0.219	—
問26	—	0.261	—	0.341
問27	—	—	0.250	—
問30	0.177	—	—	—
問35	0.254	—	—	—
問36	—	—	—	0.159

註)ここで示す数値は、各年度のステップワイズ回帰の最終モデルにおける標準化回帰係数(β)である。

(緑色つきのセルは、最終的に残した設問を示す)

註)問の内容は、表1参照。

大きな影響を与えていることが確認できた。次に、問14は、共通科目(問22、23、24)や専攻科目・コース制度(問26、27、35、36)、4学期制(問19)など複数の観点が重なり合って「カリキュラムの満足度」を支えていることが認められた。

センターでは、今後、大学の総合満足度を構成するほかの項目(学生のマナー、対人関係、学費、施設や設備、学生サービス)における設問数の絞り込みを検討していく。そして回答者の負担を軽減しながら回答内容や回収率の向上につなげたい。

本記事の執筆にあたりご指導、ご助言をいただいた本学情報学部田中豊教授に深謝する。

表1 「授業内容への満足度」を問う質問内容(問13~36)

問番号	質問内容
問13	授業内容に満足していましたか
問14	カリキュラムに満足していましたか
問15	先生の教え方に満足していましたか
問16	授業は興味を持てる内容でしたか
問17	一方的な講義ではなく主体的に参加する授業があった
問19	4学期制に満足していますか
問20	授業時間の105分は良いと思いますか
問21	共通科目の「初年次教育」に関するカリキュラム(科目数、科目内容等)に対して満足していましたか
問22	共通科目の「教養」に関するカリキュラム(配当年次、科目数、科目内容等)に対して満足していましたか
問23	共通科目の「言語」に関するカリキュラム(配当年次、科目数、科目内容等)に対して満足していましたか
問24	共通科目の「実務基礎」に関するカリキュラム(配当年次、科目数、科目内容等)に対して満足していましたか
問25	キャリア教育や就職試験対策に関する科目(共通科目)を実際に履修しましたか
問26	専攻科目の専門性・難易度に対して満足していましたか
問27	設置されている専攻科目の科目数に対して満足していましたか
問28	ゼミや演習の内容について満足していましたか
問29	卒業研究の内容について満足していましたか
問30	大教室での講義形式の授業に満足していましたか
問31	グループワークの授業はありましたか
問32	履修したい科目が同一曜日・講時に重複していましたか
問33	現在の履修登録制限(例えば前期・後期24単位まで)は少なすぎると感じますか
問34	コース開始の年次に対して満足していましたか
問35	あなたの希望したコースに満足していましたか
問36	コースの名称と内容に満足していましたか

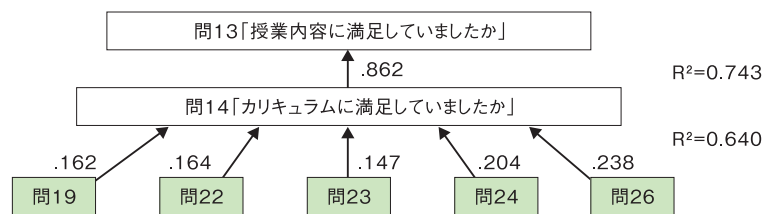


図1. 2017~2020年度におけるパス図(有効ケース数=2259)

註)問の内容は、表1参照。



学修成果の把握——キャリアアチューター・ホームカミング

2025年度

「キャリアアチューター・ホームカミング」対談

キャリアアセンターと教育開発支援センターは2025年10月18日、在学中にキャリアアチューターとして活動した卒業生を招き、「キャリアアチューター・ホームカミング」を開催した。今回は、社会で活躍する卒業生3名に、

大学時代の学びがどのように今の仕事につながっているのか、また在学中にもっと伸ばしておきたかった力は何かを聞いた。卒業生の率直な言葉から、本学の学びの成果と、今後の教育改善の方向性が見えてきた。



大学での学びは、今の仕事にどうつながっていますか

山内 まずは、大学での学びが今の仕事にどうつながっているのかを聞かせてください。

矢富 私の場合は、資格の勉強で身につけた「逆算する力」が今の仕事に活かしています。学生時代は試験日から逆算して予定を立ててい

ましたが、営業の仕事でも同じで、ゴールから考えて「今、何をやるべきか」を決めていきます。簿記などで数字を見る視点も、取引先の状況を理解する時の土台になっています。

栗田 私はチャリリーダー部での経験が大きいです。時間を守ること、礼儀、仲間と合わせて動くことなど、社会人として当たり前に求められることが、学生時代の活動の中で身につけていたと思います。インターンシップで実際に店頭立ち、接客や売り場づくりを経験できたことも、入社後に役立ちました。

竹内 私は2つあって、一つは官学連携PBLなどで発表をした経験です。「何を、どう伝えるか」を考えて人前で話す力は、今そのまま役立つと思います。もう一つは、情報や通信に関する授業です。会社の研修を理解する時に、大学で学んだ基礎が助けになりました。



出席者

- 矢富泰裕さん（経営学部卒／メーカー勤務）
- 栗田怜奈さん（短期大学部経営実務科卒／流通業界勤務）
- 竹内優弥さん（情報学部卒／情報通信系企業勤務）
- 山内 武（聞き手／キャリアアセンター所長、経済学部教授）
- 後藤 登（教育開発支援センター所長、経営学部教授）
- 南 智幸（キャリアアセンター課長）
- 濱地美和（キャリアアセンター係長）
- 衣斐孝賢（入試広報課課長）

社会に出て、もっと伸ばしておけばよかったと感じた力は

山内 一方で、「在学中にもっとやっておけばよかった」と感じることもあったのではないのでしょうか。

矢富 あります。特に大きいのは、聞く力と課題発見力です。営業では、相手が言葉にしている困りごとを引き出して、その先の課題まで考えることが求められます。相手の背景まで想像しながら聞く力が大事だと感じています。

栗田 私はPCスキル、英語、簿記、そして言葉づかいやマナーです。学生の頃はスマホで済むことも多いのですが、仕事ではやはりパソコンを使う場面が中心です。学生のうちから「社会に出ると必要になる力」だと実感できるような学びがあるといいと思います。

竹内 私は資格のとらえ方ですね。ただ「資格を取る」ではなく、「何のために取るのか」を考えることが大事だと思います。就職のためなのか、専門性を高めるためなのかで選び方も変わります。また、社会に出ると、社内外の人を巻き込みながら落としどころを探る調整力や、相手に応じて伝え方を変えるプレゼン力が本当に重要だと感じています。



先輩から後輩へ、就職支援のバトンをつなぐ キャリアアチューター

大阪学院大学のキャリアセンターが展開する就職支援の大きな特色の一つが、「キャリアアチューター」の存在である。キャリアアチューターは、早期に進路を決定した大学4年次生や短期大学部2年次生が、自らの就職活動の経験をもとに後輩の相談に応じる制度だ。自己PRの考え方、エントリーシートの準備、面接で意識したこと、企業研究の進め方など、就職活動の「リアル」を身

近な先輩の言葉で受け取れる点は、これから一步を踏み出す学生にとって大きな安心感につながっている。教職員には相談しにくい迷いや戸惑いも、少し先を歩いた先輩だからこそ率直に打ち明けやすい。

そして、この制度の魅力は、キャリアアチューターだけで完結していない点にある。大阪学院大学では、キャリアアチューターの専門スタッフが学生一人ひとりの個性や適性を踏まえて助言を行い、学部・学科ごとの担当者が継続して相談に応じている。就職活動の状況は丁寧に把握され、必要に応じて的確なアドバイスへと結びつけられる。さらに、企業ニーズをつかむための企業訪問や、国家資格を持つスタッフによる専門的な支援、ゼミ担当教員との連携など、多面的なサポート体制が整っている。その上でキャリアアチューターが加わることで、専門的で継続的な支援に、先輩ならではの体験知と親近感が重なり、学生はより具体的に自分の進路を思い描くことができる。

そこには、「自分も挑戦してみよう」と思わせる勇気や、「二人ではない」と感じられる連帯感がある。職員、教員、そして先輩とつながる「TEAM OGU」の支援体制は、一人ひとりを自分らしい進路選択へと導く。キャリアアチューターは、大阪学院大学のあたたかく実践的なキャリア教育を象徴する、心強い制度といえるだろう。



山内 インタビュの経験はどうでしたか。

栗田 実際に現場に立てたことは大きかったです。私は今、事務の仕事をしています。私には今、事務の仕事をしてはいますが、もともとは販売職として入社しているので、学生時代の経験が仕事の理解につながりました。

竹内 業界や仕事内容を知るだけでなく、「自分に向いているかどうか」を確かめる機会にもなりました。質問する力や、その場で考えて伝える力も鍛えられたと思います。

キャリアアチューター、キャリアアチューターの経験から見えたこと

山内 キャリアセンターの支援や、キャリアアチューターの経験について印象に残っていることはありますか。



矢富 就職活動中は、面談やガイダンスがとても役立ちました。うまくいかないことも多かったのですが、いろいろな方に話を聞いてもらおう中で、「一つだめでも終わりではない」と思えたのが大きかったです。まず受け止めてくれる安心感がありました。

栗田 私も面談です。自分では分かっているけど、緊張すると面接でうまく出せないことがあるので、一緒に整理してもらえたことが支えになりました。親身に話を聞いてくださった印象が強いです。

竹内 私は、自分の就職活動が終わった後に、進路に悩んでいた友人をキャリアアチューターにつないだことが印象に残っています。自分が助けてもらった場所を、今度はまわりの友人につなげられた達成感は大きかったですね。キャリアアチューターの活動で学んだのは「一人で決めないこと」の大切さです。自分の中に案があっても、みんなで決めた形をつくる。その合意形成の感覚は、今の仕事にもつながっています。

在学生に伝えたいこと、大学に期待すること

山内 最後に、在学生に今伝えたいことをお願いします。

矢富 早い段階から、「自分がどんな社会人になりたいか」を考えてほしいです。給与や休日などの条件ももちろん大事ですが、それだけで選ぶと長く続かないこともあります。自分が何をしたいのか、どんな力を活かしたいのかを軸にしてほしいですね。

栗田 大学生活は思っているより短いので、早めに動くことが大切だと思います。授業をきちんと受ける、時間を守る、言葉づかいを意識する。そういう基本を大切にすることが結局は就職活動にもつながります。SPIの対策なども、早めに始めた方がいいと思います。

竹内 私も、まず大学にきちんと来ることだと思っています。よい就職先に就いている人は特別な一部の学生だけではありません。どんな準備をして、どんな行動を積み重ねたのか、その過程が見えると、学生はもっと動きやすくなると思います。

まとめ

山内 本日の話から、大学での学びが社会の中で確かに活かしていることが分かりました。その一方で、聞く力、課題発見力、PCスキル、マナー、調整力、プレゼン力など、さらに実践的に伸ばしていくべき力も見えてきました。卒業生の皆さんの声を、今後の教育改善とキャリア支援の充実につなげていきたいと思えます。

今回の対談では、社会で求められる力を、学生時代のうちにより具体的に実践的に身につけられるようにすることの重要性も共有された。卒業生の率直な声を、本学の今後の取り組みに活かしていきたい。

産業界との意見交換会

短期大学の自己点検活動の一環として



本学短期大学部では、自己点検・評価（内部質保証）の客観性・公平性を高めるため、実習先など産業界（地域社会）との意見交換を継続している。今回は受け入れ協力機関である大阪府立病院機構を2026年3月4日に訪問し、インターンシップの設計や学生に求められる力、AI時代の職業教育のあり方について意見を交わした。

後藤 まずは、日頃のインターンシップ受け入れへの御礼を申し上げます。短期大学部は1年ほどで現場に出ますので、受け入れ側のご負担も大きいと思いますが、改めて、どのような位置づけでとらえておられますか。

平田 率直に言うと、「就職してほしいから受け入れる」というより、学校とのつながりを大切にしたい、という思いが大きいです。もちろん採用につながればうれしいですが、目的をそこに置きすぎると、双方にとって学びが浅くなってしまうと思います。加えて、受け入れる側にもメリットがあります。職員が学生に説明したり教えたりすること自体が、育成や振り返りの機会になるんです。普段は「教える側」になりやすい部署もあるので、よい訓練になります。

木村 受け入れ側の「人を教える経験」も育つ、ということですね。実際、5日間のプログラム

出席者

- 平田 誠和様（大阪府立病院機構 本部事務局 次長兼総務マネージャー）
- 谷口 莉緒様（大阪府立病院機構 本部事務局 人事グループ 主事）
- 木村 貞子（短期大学部 経営実務科 長）
- 後藤 晃範（短期大学部 経営実務科 長代理）
- 金崎 暁子（司会進行 / 教育開発支援センター 課長）

はどのように組まれているのでしょうか。

平田 初日はオリエンテーションから始め、期間中は複数の部署をローテーションして体験してもらいます。学生さんにとっては「自分がどんな業務に向いているのか」をつかむきっかけになりますし、こちらとしても部署の説明力や受け入れ体制を点検できます。担当者が、各部署と日程調整をして準備してくれているので、現場も協力しやすい形になっています。

谷口 病院は患者さんがいらっしゃる現場なので、受け入れには配慮が必要です。その点、事務局など管理部門は比較的受け入れがしやすく、学生さんにも「病院を支える仕事」の全体像を見ていただけます。

後藤 学生側には「病院」医療事務（レセプト）というイメージも根強くあります。そこはギャップになりませんか。

谷口 そこは事前に丁寧に伝えていただくと助かります。私たちの受け入れは、いわゆる医療事務の実務というより、病院運営の管理部門が中心です。医療事務を強く志望する学生さん



だと「思っていたのと違う」と感じる可能性があまりあります。ただ、PCスキルや社会人基礎力を身につけたい、という目的で来られる方も多いので、「病院の中の事務」を幅広く知る機会としてとらえてもらえればと思います。



木村 受け入れ先には、4年制大学の学生さんも来られますよね。3年生と、短大の1年生で、違いは感じますか。

平田 大きなギャップはあまり感じません。事務職志望の学生さんは、学年よりも「やりたい仕事が見えているか」「現場で吸収しようとしているか」で差が出る印象です。もちろん応募数としては4年制が多いのですが、選考では短大かどうかで線を引くというより、同じ土俵で見たいです。

後藤 インターンシップ後の学生は、見違えるほど成長して戻ってきます。受け入れ先から見て、「ここは事前指導で押さえておいてほしい」という点がありますか。

平田 特別な「型」を押しつける必要はないと思います。ただ、学生さん自身が「何を見に行くのか」「何を持ち帰りたいのか」を言語化できると、現場での学びが深まります。受け身にならず、質問できる状態で来てもらえると、こちらも業務の背景まで説明しやすいですね。

木村 2023年度に貴機構でインターンシップに参加した本学卒業生の速水さんが、2025年4月に入職しました。現場の皆さまの温かいご指導が、背中を押してくださったのだと思ってい

ます。

金崎 速水さんのインターンシップ活動は、とても充実していたようで、事務担当の私にもいろいろと話を聞かせてくれました。

木村 入職の報を聞いた時は本当にうれしかったですね。本人からも「厳しい選考だった」と聞いています。インターンシップで現場を具体的にイメージできたことが、面接で自分の言葉で語る支えになったのでは、と感じます。

後藤 採用の話もうかがわせてください。短い面接の中で、どのような点を重視して見ておられるのでしょうか。

平田 私が一番意識しているのは「過去の経験を掘り下げる」ことです。例えば「アルバイトでリーダーでした」と言われたら、人数や具体的な状況、困ったこと、そこでどう動いたかを詳しく聞きます。嘘はつけないですし、話が止まるところで分かる。そこで見たいのは「再現性」です。入職後に同じように考え、動けるかどうか。

谷口 飾りすぎず、自然体で話せるかも大きいですね。学歴よりも、「その人らしさ」が仕事の場面でどう出るかを見ています。

木村 「決まったことを正確にやる」だけでなく、その先が求められている、と。

平田 まさに。処理自体はAIやシステムがほとんど肩代わりしていきます。だからこそ、集めたデータが経営のどこにどう影響しているのか、背景を調べて確かめ、意味づけできる人が必要になります。AIが答えを出してくれても、その真偽を見極められないと危うい。そこで「考える力」と「検証する力」が問われると思います。

後藤 大学側も、AIを禁止するかどうかでは

なく、「どう問い、どう使い、どう確かめるか」

を学びの中心に据える必要がありますね。本学ではPBL（課題解決型学習）も進めています。が、現場の視点から期待することはありますか。

平田 答えのない課題に取り組み経験は大きいですが、グループで議論し、役割分担し、相手の意見を聞きながら結論を組み立てる。その過程で、AIも「思考の壁打ち相手」として使えばよい。ただし、最後は自分の言葉で筋道を立てて説明できることが大切です。

木村 経営実務科としては簿記など「知識」の学びも扱います。採用の現場では、資格や簿記の位置づけはどうでしょう。

谷口 知識があつて損はないですし、経営を考える上で数字に強いことは助けになります。ただ、それが第一優先ではありません。入職後に必要に応じて学んでもらう形です。

後藤 次年度以降もインターンシップ受け入れをご検討いただけますか。

平田 コロナ禍のような制約がなければ、ぜひ。希望があれば、また一緒に取り組みましょう。

——本日の意見交換を通して、インターンシップが学生の成長を促すと同時に、受け入れ側にとっても職員の育成と振り返りの機会となることを再確認した。意見交換会において得られた示唆は短期大学部FD推進部会で共有し、事前指導やPBL等の学びを見直しながら、AI時代に求められる「考える力・検証する力」を育む教育への改善につなげていきたい。大阪府立病院機構の皆さまに感謝するとともに、次年度以降も受け入れのご協力を願いたい。

学生の主体性を引き出す授業づくり ——「全員発揮型」の視点から見えてきたこと——

教育開発支援センター 課長 金崎 暁子
教育開発支援センター 所員 国際学部 准教授 中 則夫
大阪学院大学 非常勤講師 石田 知子

近年、大学教育では、学生の「主体性」をどう育てるかが大きな課題となっている。もともと、現場の実感としては、主体性という言葉はよく用いられる一方で、それを授業の中で実際にどう引き出すのかとなると、容易ではない。学生に「もっと積極的に」と促しても、即時的には行動に結びつきにくく、グループワークを取り入れても、発言する学生が固定化したり、議論が進まないことも多い。我々も授業や学生支援の場面で、学生に任せたい一方で、任せただけではうまくいかないという現実と直面する。

そのような問題意識を持つ中で、大きな示唆を得たのが、2024年度第2回FD・SD講演会「全員発揮型のリーダーシップ教育」の推進である。そこで示されたのは、リーダーシップを一部の学生が持つ特別な資質としてではなく、「チームの目標達成のためにほかのメンバーに与える影響」としてとらえる考え方である。つまり、従来の「前に立つて強く引っ張る」ことだけがリーダーシップではなく、意見を引き出す、場を和ませる、状況を整理する、困っている仲間と声をかけるといった行動もまた、チームを前進させる重要な働きとして位置づけられる。この考え方に触れた時、我々は強く納得がいった。というのも、学生個々が得意な役割でもグループ活動に寄与できることを、日頃から感じていたからである。

もともと、考え方として理解できても、「では本学でどう実践するのか」という問いは残る。国際学部の1年次ゼミナールやキャリアデザイン科目でグループワークを試みたが、現実にはさまざまな難しさがあるのだ。例えば、欠席者が頻繁に出て役割分担が崩れる、目標共有が不十分で議論の方向が定まらない、質問したり相手の意見を受け止めたりする力がまだ十分ではない、といった課題がある。こうした経験を経て痛感したのは、主体性は「自由にやってよい」と伝えるだけでは育たないという現実だ。むしろ、

目標の共有、役割の分担、丁寧な振り返りの機会といった授業設計の工夫があつてこそ、学生は円滑にグループワークを実践できるのではないかと考えられる。

この考えは、後日我々が視察した甲南女子大学での授業や実践報告の内容を知ることでも確信に変わった。特に印象的なのは、上級生のL A (Learning Assistant) が授業進行や下級生支援を担い、授業後には教員とともに綿密な振り返りを行う点だ。また、学生が前面に立つて授業を進行させる裏では、分単位で組まれた授業計画と、受講者のリーダーシップ経験を言語化する仕組みがしっかり存在している。つまり、学生の主体性が自然発生的に生まれているのではなく、教員側によって整えられたプログラムにより効率よく引き出されており、長年の授業ノウハウが蓄積されていることが理解できた。

本学でも、この視点を踏まえた実践が少しずつ始まった。例えば、1年次生対象科目の「キャリアデザイン入門」では、2年次生3名が1年次生を支援する場面を取り入れ、活動後には自分の行動や他者から受けた影響を振り返る機会を設けた。見えてきたのは、学生が自分に対する他者からの肯定的なフィードバックによって強い影響を受けるといった事実である。何気なく行った声かけや助言が、仲間にとって心強い支えになると気づくことで、学生は大きく成長できるのだ。「自分も誰かの役に立てる」という感覚は、主体性のスイッチを入れる可能性がある。

また、短期大学の学内インターンシップでは、2年次生が1年次生のグループワークを支援する取り組みが行われた。興味深いのは、上級生が前に出て答えを与えるのではなく、あえて見守る姿勢を取っている点だ。その学生は、「普段は自分が前に出るタイプだが、今回は1年次生に自ら考え、解決してほしいと思ったので、できるだけ見守った」という印象的な振り返りを発表で語っていた。支援とは、ただ

助けることではなく、相手が自分で動き出す余地を残すこともあると

考えさせられる。授業では、こうした関わりの中で、あまり発言しなかった受講生が自分の意見を述べるようになったり、役割を避けがちだった学生も新しい役割に挑戦するようになったという。自己肯定感の向上や、グループワークへの苦手意識の改善が見られたことも、こうした小さな成功体験の積み重ねと関係があると考えられる。

もちろん、本学の取り組みはまだ始まったばかりだ。学部や授業規模の違いを踏まえた工夫も必要である。それでも今回の一連の実践を通して、主体性とは一部の学生だけが持つ特別な資質ではなく、適切な設計と支援によって多くの学生の中から引き出しうる力だと考えるのは大きな前進だと言える。とりわけ重要なのは、第一に、全員が何らかの形で貢献できるというメッセージを明確に示すこと、第二に、振り返りを通して自分の行動の意味を自覚させること、第三に、教員だけでなく上級生や仲間同士も含めた支え合いの仕組みをつくることである。

今回の取り組みを通して、学生の主体性を育てるとは、学生をただ前に押し出すことではなく、その一歩が踏み出せるように学びの場を整えることなのだと思つた。今後とも教育開発支援センターでのFD・SD活動と授業実践とを往還させながら、本学らしい主体性育成のあり方を考え続けていきたい。

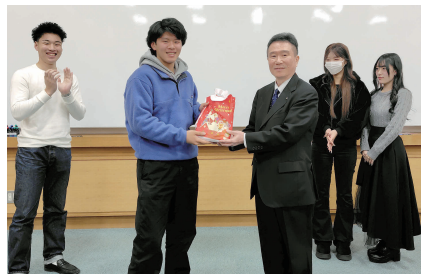


吹田市との官学連携PBL 学生の提案が、まちの実践へ

1年次生対象科目「キャリアデザイン入門Ⅰ」で継続する吹田市との官学連携PBL。2025年度は「子育て賞」「吹田クロス賞」が選ばれ、2024年度「人権賞」受賞チームの提案は平和祈念資料館のホームページ刷新や「謎解きイベント&すいとん試食会」へと発展した。学生の学びが、地域の具体的な施策につながっている。

2025年度の成果

2025年度後期は、児童部子育て政策室から「どうすれば自分たち学生は市役所に意見を言いやすくするか」、都市魅力部シティプロモーション推進室から「市民主体の魅力発信『吹田クロス』を広めるには」という2つの課題が提示された。4つのグループが調査と議論を重ね、「子育て賞」に「ラファエルエリアス」、「吹田クロス賞」に「未来Cross」が選ばれた。



2025年度課題解決発表会の表彰式

「ラファエルエリアス」は市役所の仕事を身近に伝えるSNS発信と意見交換会、「未来Cross」はTikTokとInstagramを使い分けた発信戦略を提案。市役所や地域の魅力を、学生自身の視点でどう翻訳し、同世代へ届けるかが問われた。

また、2025年度は2年次生が学生サポーターとして加わり、1年次生の議論や発表準備を後押しした。課題に向き合う学びを学年を越えてつなぐ試みとしても、印象的な年度となった。

2024年度「大梨」の提案

より大きな広がりを見せているのが、2024年度「人

権賞」を受賞した「大梨」チームの取り組みである。市民部人権政策室から示された課題は、「若い世代に平和についてより興味・関心を持ってもらい、吹田市立平和祈念資料館の来館につながるにはどうすればよいか」。

学生たちは来館者の利用実態や同世代への訴求方法を調べ、スマートフォンで見やすいホームページへの刷新、オリジナルロゴの制作、平和クイズやクロスワードの導入、SNS発信、体験型展示などを提案した。VRによる戦後復興体験やメッセージ投稿コーナーなど、若い世代が自分ごととして平和を考える仕掛けも盛り込まれていた。

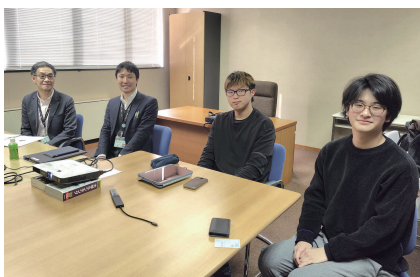
発表で示されたアイデアは、授業内の提案にとどまらず、実践可能な行政提案として高く評価された。平和祈念資料館という公共施設に、学生ならではの発想を持ち込み、情報発信と来館体験の両面から改善を試みた点に、この提案の独自性があった。

実践、そして展開へ

その後、2025年4月には平和祈念資料館ホームページが学生提案を反映してリニューアルされ、ロゴの設置、レイアウト整理、平和クイズ・平和クロスワードの公開へとつながった。学生の視点が、市の広報と来館促進の具体策として採用



2024年度「人権賞」受賞チーム「大梨」の発表



吹田市の担当者と協働しながら企画を具体化

されたのである。

さらに現在も、月替わりの平和クイズ更新や新企画の検討が進み、授業終了後も学生が改善のプロセスに関わり続けている点は、このPBLの大きな成果といえる。

2026年3月には、その学修成果が「謎解きイベント&すいとん試食会」へと発展した。地域の学びの場を学生が広げている。



すいとん試食会の様子(2026年3月22日)

展開の流れ

2024年12月 「人権賞」受賞

2025年4月 平和記念資料館HPリニューアル

2026年3月 「謎解きイベント&すいとん試食会」

学生の声

「提案で終わらせず、吹田市職員の方と対話を重ねながら形にする中で、相手の立場に立って考え、粘り強く行動する大切さを学びました。大学での学びが社会につながる実感でございました」

商学部3年次生 小山智行さん
経営学部3年次生 藤本理伯さん

「提案して終わり」ではなく、学生が行政担当者との対話を重ねながら改善と実践に関わり続けている点に、このPBLの大きな価値がある。地域課題に向き合う学びが、学生の成長と自治体の施策の双方につながっていることを、「大梨」チームの活躍が示している。2025年度の取り組みもまた、次年度へと続く新たな成果を生み出していこう。

基礎から実践へ

「OGU数理・データサイエンス・AI教育プログラム(応用基礎レベル)」始動

本学では、2020年度に共通科目としてAI関連科目を開設し、2023年度には「OGU数理・データサイエンス・AI教育プログラム」を設置してきました。さらに2024年度には、文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」において「リテラシール」の認定を受けています。こうした歩みを土台として、2026年4月から新たに始まるのが「OGU数理・データサイエンス・AI教育プログラム(応用基礎レベル)」です。これは、AIを「知る」段階から、自らの専門分野で「活かす」段階へと学びを発展させるための新たな教育の柱です。

この取り組みを支えてきたのが、全学AI教育推進会議(専門部会)です。会議では、本学におけるAI教育のあり方を全学的な視点から検討し、2020年度に開講したAI関連3科目の教育成果を検証しながら、文部科学省の認定制度への対応を進めてきました。教育目的や到達目標、学修成果の確認、制度対応までを一体的に進める体制が整ったことは、本学のAI教育にとって大きな前進といえます。

応用基礎レベルは、共通科目における「基盤的プログラム」として位置づけられています。その目的は、AIやITを活用する知識・技能をさらに深め、とりわけ人文・社会科学系の学生におけるAIリテラシールと情報活用力を一層強化することにあります。教育目標としては、AI・データサイエンスの基本概念やツールを用いて自らの専門分野の課題を分析・整理する力、分析結果をもとに新たな価値創出につながる提案を論理的に構築し共有する力、さらにAI活用に伴う社会的・倫理的課題を理解し、適切に判断して実践する力の育成が掲げられています。

2026年4月からは、共通科目の「実務基礎」区分に「データサイエンス基礎」と「AI活用基礎」の2科目が新設されます。いずれも2単位・2年次配当で、2023年度以降の入学学生が対象です。両科目を修得した学生には修了証が授与され、短期大学の学生も単位互換により履修できます。春学期の「データサイエンス基礎」では、データ駆動型社会の理解に始まり、数学基礎、分析設計、データ観察、可視化、分析アルゴリズム、データエンジニアリング、プログラミング、データベース、ITセキュリティまでを体系的に学びます。秋学期の「AI活用基礎」では、AIの歴史と社会、機械学習、深層

表 OGU数理・データサイエンス・AI教育プログラム開講科目一覧

プログラム名称	科目名称	配当年次・単位数
OGU数理・データサイエンス・AI教育プログラム	AI活用入門A	1年次配当・各1単位
	AI活用入門B	
	AI活用演習	1年次配当・2単位
OGU数理・データサイエンス・AI教育プログラム(応用基礎)	AI活用基礎	2年次配当・各2単位
	データサイエンス基礎	

学習、認識、言語・知識、生成AI、AIの構築・運用などを扱い、実社会でAIを活かす視点を育てます。

全学AI教育推進会議(専門部会)議長の小川雄三教授は、「AI教育を一部の授業や個々の教員の努力にとどめず、教育成果を検証しながら全学で継続的に改善していくための基盤を整った点に大きな意義があると見ています。その上で、リテラシールレベル認定を土台に、応用基礎レベルでは学生が自分の専門分野の中でデータとAIを使いこなし、課題解決や新たな価値創出へと結びつけられる力を養ってほしい」と新プログラムへの期待を寄せています。

連載企画 5

学部を越える学びが、日常を変える —OGUリベラルアーツプログラム修了生インタビュー—

本学の「OGUリベラルアーツプログラム」は、アクティブラーニングを通して、人文芸術・社会科学・自然科学・スポーツ健康科学の4領域を横断的に学ぶ共通教育プログラムです。各領域の知識をつなぎ合わせながら、フィールドワークやPBL(課題解決型学習)などの体験的な学修を通して、新たな知見を創造する力を養います。こうした学びを通して、「自分の考えを伝える力」「俯瞰する力」「豊かに生きる力」という3つの能力を育てることを教育目標としています。2022年度にスタートしたこのプログラムですが、今回は初の修了者である久馬朋也さん(2026年3月経営学部卒業)に、学びの経験について話を聞きました。



久馬 朋也さん

—OGUリベラルアーツプログラムを履修した理由を教えてください。

久馬 「将来のために視野を広げたかったからです。学部を越えて学べるところに魅力を感じました」

—一番印象に残った授業は何ですか。

久馬 「社会科学PBL学習(フィールドワーク)です。茨木、淡路、新大阪、梅田と配付された地図をもとに事前に立地や構造を調べ、現地では街並みや利便性を五感で確かめながら気づきや課題を整理しました。地図で見える印象と実際に歩いて感じる印象には大きな差があり、JR岸辺駅周辺の街づくりとも比較しながら考察できたことが印象に残っています」

—自分の考えを伝える力、俯瞰する力、豊かに生きる力のうち、どの力が伸びたと感じますか。

久馬 「豊かに生きる力」です。街で目にしたゴミの散乱や植栽、電車の広告、ニュースで見る自然災害などを、自然科学や社会科学の知識と結びつけて考えられた瞬間に成長を感じました。背景や構造まで考えることで、多角的な側面やSDGs、持続可能性の課題にも気づけるようになり、日常の出来事が以前より意味のあるものに感じられるようになりました」

今回のインタビューからは、学部の枠を越えて知識をつなぎながら学ぶことが、学生の日常の見方や考え方を大きく広げていることがうかがえました。教室で得た知識と、フィールドワークやPBLでの体験を結びつけることで、学びはより深く、自分自身の成長として実感されています。

OGUリベラルアーツプログラムの詳細はこちらをご覧ください。



2025年度 第1回FD・SD講演会 開催報告

2025年4月28日

2025年度第1回FD・SD講演会が、セクシユアル・ハラスメント等に関する人権委員会と教育開発支援センターの共催により開催されました。大阪弁護士会所属・弁護士法人大江橋法律事務所の山田真吾弁護士をお招きし、「学内で生じうるハラスメントに対する理解とその予防」をテーマにご講演いただきました。



山田真吾 弁護士

2025年度 第2回FD・SD講演会 開催報告

2025年7月24日

2025年度第2回FD・SD講演会が、教育開発支援センターと庶務課人事係の共催により開催されました。今回は、上智大学前学長の曄道佳明教授をお招きし、「日本の高等教育の課題と可能性」学びを人の成長へ」をテーマにご講演いただきました。大学における学術的な学びと人の成長の関係性について問題提起され、単に知識を修得するだけでなく、学生一人ひとりが個性的に成長することの重要性を述べられました。



上智大学 曄道佳明 教授

2025年度 第3回FD・SD講演会 開催報告

2026年3月4日

2025年度第3回FD・SD講演会が、教育開発支援センター・庶務課・教務事務室・教務課の共催、ならびに数理・データサイエンス・AI教育強化拠点コンソーシアム(近畿ブロック)の後援により開催されました。今回は「生成AI活用時代におけるOGU数理・データサイエンス・AI教育プログラムの授業改善と展開」をテーマに、本学の数理・データサイエンス・AI教育の実践事例を全国の大学等と共有しました。本学の教職員のほか、全国の大学等の教職員の参加をいただき、盛会のうちに終了しました。



京都大学 山本章博教授の基調挨拶

2025年度 FD・SDワークショップ 開催報告

2025年10月10日

2025年度FD・SDワークショップは、「学生一人ひとりが主体的に行動し、チームを前進させるには？」をテーマに、2024年度第2回FD・SD講演会で紹介された「全員発揮型のリーダーシップ教育」をもとに、学生が主体的に学び、チームとして成長していく授業づくりについて意見交換が行われました。



2025年度
FD・SDワークショップの様子

進学説明会(教員対象)開催日程

高等学校、予備校の進路ご担当の先生方を対象とした進学説明会を次のとおり開催いたします。

なお、すべての日程において事前予約制としておりますので、ご希望の先生はあらかじめ入試広報課までお申し込みをお願いいたします。

開催日	開催地	会場および所在地
5月12日(火)	大阪南	都シティ 大阪天王寺 大阪市阿倍野区松崎町1-2-8 tel. 06-6628-3200
5月15日(金)	大阪北	ザ・リッツ・カールトン大阪 大阪市北区梅田2丁目5-25 tel. 06-6343-7000
5月19日(火)	京都	ホテルグランヴィア京都 京都市下京区烏丸通塩小路下ル JR京都駅中央口 tel. 075-344-8888
5月22日(金)	本学	大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部
5月26日(火)	本学	大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部

14:00 受付開始

15:00 挨拶

本学の取り組み・サポート体制について

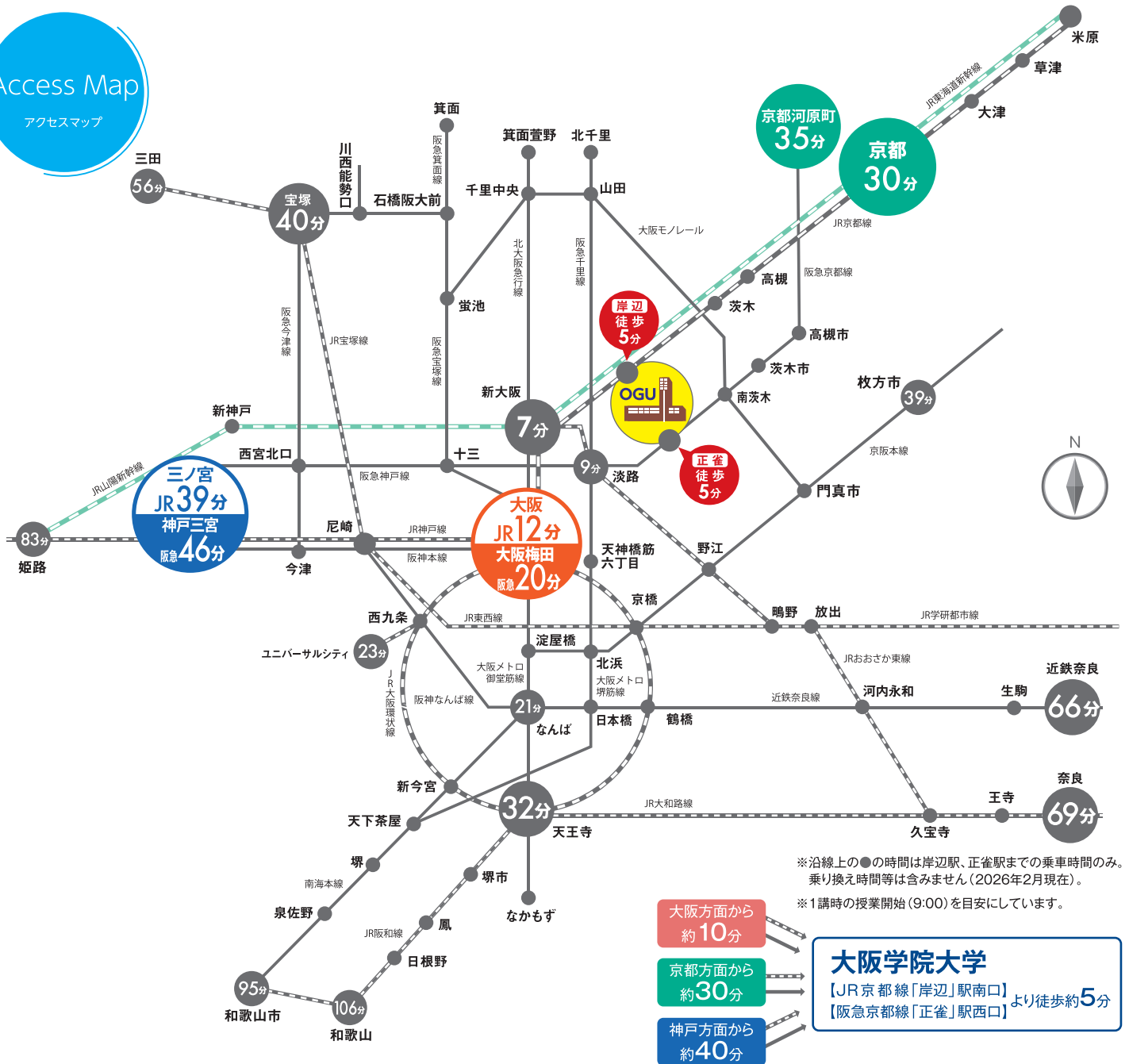
2026年度の入試結果ならびに2027年度入試概要について

16:30 終了予定

●お問い合わせは、入試広報課まで
tel. 06-6381-8434 (代表)
受付時間 9:00~17:00(ただし、日・祝は除く)

Access Map

アクセスマップ



※沿線上の●の時間は岸辺駅、正雀駅までの乗車時間のみ。乗り換え時間等は含まれません(2026年2月現在)。
 ※1講時の授業開始(9:00)を目安にしています。

大阪方面から 約10分
 京都方面から 約30分
 神戸方面から 約40分

大阪学院大学
 【JR京都市線「岸辺」駅南口】より徒歩約5分
 【阪急京都線「正雀」駅西口】より徒歩約5分

OPEN CAMPUS 2026

事前申込でスピード入場

開催日 6月14日(日) 開催時間 10:00~15:00
 7月25日(土)・26日(日)
 8月22日(土)・9月6日(日)
 ※7/26(日)に各地からのバスツアーを実施

対象
 高校生(全学年)・
 既卒者・保護者

プログラム 入試説明、個別相談(学部・学科/入試/奨学金/就職/資格/留学など)、
 キャンパスツアー ほか ※詳細については本学オープンキャンパスサイトをご確認ください



渺望 vol.21 2026年5月発行

編集/OGU教育開発支援センター事務局
 発行/大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部

ご意見・ご感想をお寄せください。
 お問い合わせ先 06-6381-8434 (代表)
 edtc@ogu.ac.jp

「渺望」について

“ああ渺々と雲の果て……”と歌われる学院歌。そこでは、学生の眼前に広がる社会や世界をより確かに望む学びを提供する大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の教育への姿勢を歌っています。「渺望」というタイトルの一文字一文字には、常に学生の視点から学生一人ひとりの個性を伸ばし、能力を育む斬新な教育改革に取り組む本学の決意と、未来を展望し、自らの道を進む学生たちのいきいきとした姿を託しています。



- 大学院/商学研究科・経済学研究科・国際学研究科・法学研究科・コンピュータサイエンス研究科
 - 商学部/商学科 ●経営学部/経営学科 ●ホスピタリティ経営学科 ●経済学部/経済学科 ●法学部/法学科
 - 外国語学部/英語学科 ●国際学部/国際学科 ●情報学部/情報学科
- 大阪学院大学短期大学部(女子) ●経営実務科
 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号 TEL.06-6381-8434 (代表)
 公式サイト <https://www.ogu.ac.jp>